

JAPANESE

イーサー(イエス)

(彼に平安あれ)

クルアーンのなかで
他の物語

「また、あなたがわが許しによって、
泥土で鳥の形のようなものを作り、
あなたがそこに息を吹き込んで、
それがわが許しによって(本物の)
鳥となる時のこと。」

(食卓章110節)



イーサー(彼に平安あれ)は、歴史上最も重要な人物の一人とみなされます。人類に貢献した偉大な人物ですが、彼に関して人々の立場は相違しています。神格化する人もいれば、主の息子とする人もいます。敵対し、非難し、いわれのない批判を浴びせる人たちもいます。さて、イーサー(彼に平安あれ)についてクルアーンの立場はどのようなものなのでしょうか？

1. イーサーは最も偉大な使徒の一人:



クルアーンは、イーサー(彼に平安あれ)が最も偉大で栄誉ある使徒の一人であると強調しています。彼の母親であるマルヤムは、篤信者、主によく仕える熱心な崇拝者であり、貞淑で清純な処女でした。偉大なアッラーの御力によって、イーサーを父親なしに身籠りました。

ちょうどアダムを父親も母親もなしに創造したように、残り続ける奇跡として彼を創造しました。アッラーがクルアーンのなかで言われたとおりです。

「本当に、アッラーの御許におけるイーサーの状況は、まるでアダムのようなもの。アッラーが土から彼を創造され、それに人間となれ、と仰せられるだけで、それはそうなるのである。」
(イムラーン家章59節)



2. ムスリムは奇跡を信じる:

ムスリムは、アッラーがイーサーの手によって起こした奇跡の数々を信じます。皮膚病患者や盲目の者を治したり、死者を生き返らせたり、彼らが食べるものや家々に貯蓄するものについて告げたりしました。それらはすべて完全無欠なアッラーのお許しによって起きたことで、それを彼の預言者性、使徒性の明らかな徴としたのです。



25回

人類に大きな影響を与えたイーサーの名に、その地位と位階を高めてクルアーンは25回も言及しました。

食卓章

食卓章はクルアーンのなかで最も長い四つの章の一つです。イエスの奇跡の一つが章名となっています。

クルアーンのなかのイーサー (彼に平安あれ)



イムラーン家章

クルアーンのなかでも長い章で、イーサーの母マルヤムの祝福された家族の名で名付けられている章です。

マルヤム

クルアーンの章のなかで、章名が女性の名前で名づけられているのは、イーサーの母マルヤムの名だけです。

32回

イムラーンの娘マルヤムの地位を高め、クルアーンは彼女の名を32回も言及しました。

クルアーンは、イエスの最も偉大な奇跡の内の一つに言及します。それは、泥土から鳥の形を作り、そこに息を吹き込めば、アッラーの御力により魂のある本物の生きた鳥になったことです。

3. アッラーの神聖な聖典、インジール(福音)が啓示された:

アッラーは、最も偉大な啓典のひとつインジールをイーサーに下されたことをクルアーンは強調します。人々を導くための光であり慈悲であるインジール(福音)です。しかし、福音は、歴史を通して様々な改ざんや誤った解釈がされてしまいました。



4. 彼は人間であって神ではない:

イーサーは、アダムの子孫で人間であることをクルアーンは強調します。アッラーは、恩恵を与えイスラエルの民に遣わし、彼の手により多くの奇跡を起こさせましたが、創造主でもなければ神性の所有者でもありませんでした。アッラーがクルアーンのなかで言われた通りです。「彼(イーサー)はわれらが恩恵を授け、イスラエルの子らへの譬えとした、一人の僕にすぎない。」

(金の装飾章49節)

5. 磔にされたわけではなく、天に召し上げられた:

イーサーは殺害されておらず、磔にされたわけでもなく、アッラーは彼を天に召し上げたのだとクルアーンは指摘しています。イーサーの敵たちが彼を殺害しようとした時、アッラーはイーサーではない別の人物を彼に似させたことで、敵対者たちはその人物をイーサーと思い込み、殺害し十字架に磔にしました。一方、イーサーは生きた状態のまま既に天に召し上げられていたことはクルアーンが断定する通りです。



「また彼らの、「本当に私たちはマルヤムの子息マシーフ・イーサー、アッラーの使徒を殺したぞ」という言葉ゆえに(われらは彼らを呪ったのだ)。彼らは、彼を殺してもいなければ、磔の刑にもしていない。だが、彼らには似通って見えたのだ。本当に、彼について意見を異にした者たちは、まさしくそこにおいて疑念の中にあつた。彼らはそのことについて僅かばかりの知識もなく、ただ憶測に従っていたに過ぎない。そして彼らは、確信をもって彼を殺したわけではなかったのだ。いや、アッラーは彼(イーサー)をかれの御許に(魂と肉体と共に)お召しになったのである。アッラーはもとより偉力ならびにお方、英知あふれるお方。」

(婦人章157-158節)